OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハンセン病患者のライフヒストリーとしての短歌 : 明石海人の歌集『白描』について
Author(s)	松岡, 秀明
Citation	Communication-Design. 2015, 13, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/53839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハンセン病患者のライフヒストリーとしての短歌：明石海人の歌集『白描』について

松岡秀明（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Tanka as Life History of Leprosy Patient: On Kaijin Akashi's *Hakubyō* published in 1939

Matsuoka, Hideaki (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

ハンセン病の歌人として知られる明石海人（1901～1939）が生前に刊行した唯一の歌集『白描』（1939）は、25,000部を売り上げたベストセラーとなった。『白描』は、「第一部 白描」と、「第二部 翳」に分けられるが、本稿は四つの特徴からなるパーソンズの「病人役割」（sick roll）という概念を用いて、「第一部 白描」の短歌が示すハンセン病患者がこれらの四つの特徴を有しているか否かを検討する。そして「第一部 白描」当時のハンセン病患者のライフヒストリーとしての性格を持つことを指摘し、それがどのように成立したかを検討する。

This paper explores a book of Tanka entitled *Hakubyō* published in 1939. The book became a best seller selling 25,000 copies. The book consists of two parts namely "*Hakubyō*" and "*Kage*". Referring to Parson's analytical idea "sick role," I examine the first part which is a life history of a leprosy patient. Then I analyze how and why this first part was published.

キーワード
ハンセン病、短歌、ライフヒストリー、ナラティブ
Leprosy, Tanka, Life History, Narrative

はじめに―明石海人とは誰か

日本には、「ハンセン病文学」というジャンルがある。ハンセン病患者による小説、短歌、俳句などを収めた全10巻の『ハンセン病文学全集』が刊行されており、現在では比較的容易に作品を読むことできるようになっている。「ハンセン病文学」は、かつて「癩文芸」と呼ばれていた。

1939年に国立癩療養所長島愛生園の入園患者である明石海人の歌集『白描』が改造社から出版されるとすぐに、明石海人はこの「癩文芸」を代表する歌人として知られるようになった。2012年、岩波文庫に村井紀編の『明石海人歌集』が入り、明石の名はこの病気に関心を持たない人の間でも知られるようになってきている。

明石海人の生涯については、荒波［2000］、山下［2003］、岡野［1993、2006］など詳細な

研究がすでにあるので、簡単に示すにとどめる。明石海人（本名野田勝太郎）は、1901年（明治34）7月5日沼津市に生まれた。沼津商業から静岡師範に進み、同校を卒業した1920年に小学校教員の職を得る。1924年には同僚の浅子と結婚し、2児をもうけている。しかし、1926年25歳でハンセン病と診断されると職を辞し、和歌山の粉河や兵庫のハンセン病治療施設私立明石楽生病院で療養生活を送った。そして、1931年3月に患者の受け入れを開始した岡山の長島愛生園に1932年11月に入り、終世そこで過ごした。1935年に失明し、1938年には気管切開を受け、1939年（昭和10）6月9日、37歳の人生を終えた。

明石海人についてはこれまでさまざまな人々が論じてきたが、歌集『白描』の「第一部白描」をハンセン病患者のライフヒストリーと捉え、それがどのような意図のもとに編集されたかについてはこれまでにまとまった研究は存在していない。この研究ノートは、そのような試みのための方向を明らかにするものである。

1. 1930年代におけるハンセン病患者の病人役割

社会科学の領域において、「病人役割」（sick roll）という概念を示して病気の社会的な意味を分析することの重要性を広く知らしめたのはパーソンズである。パーソンズは病気について何度か論じているが［Parsons 1951, 1958 , 1978］、初めて病気に論及した『社会体系論』でパーソンズは次のように述べている。

> 病気（illness）とは、一人の人間の総体の「正常な」（“normal”）機能における攪乱（disturbance）状態である。この状態は、生物学的システムとしての有機体の状態と、その人間の個人の調整、また社会との調整を含んでいる［Parsons 1951: 431］。

ここでパーソンズは、病気を、（i）生物としての人間、（ii）個人としての人間、（iii）社会的存在としての人間、の三つの側面に分けた。もちろん、これら三つは相互に密接に関係しているのだが、病気の社会的意味に注目した点が重要である。そして、パーソンズが創出した概念としての病人役割は、この2番目と3番目の側面とかかわってくるが、それは後に検討する。

ハンセン病を例にとって、これら三つの側面を具体的に考えてみる。パーソンズが用いる意味での病気は、時代によって変化する。本稿で検討する明石海人が生きた時代において、この病気は「癩」と呼ばれていた。本稿では以下「癩」という呼称を用いるが、その理由を説明する。「癩」という言葉が、極めてネガティブなコノテーションを持っていたことは言うまでもない。この疾患の名がハンセン病と改められたのは、第2次世界大戦後の患者たちの運動の成果だが、本稿が分析するのは明石海人の短歌、そしてその背景となるこの病気の当時の捉え方である。当時この病気は「癩」と呼ばれ、患者たちは過酷な差別を受けてい

た。この時代を対象とする研究でハンセン病という呼称を用いると、当時のそのようなコノテーションが捨象されてしまうと筆者は考えるので、本稿では癩という呼称を用いる。

まず、生物としての人間の側面について考えてみるならば、当時すでにバイオメディシンによって、この病気の病原体としてらい菌（*Mycobacterium leprae*）、症状として、失明、手足の変形、疼痛等々が明らかにされていた。つぎに、個人としての人間とこの病気とのかかわりを見ると、患者は先にあげたような症状と否応なく対応しなければならなくなる。そして、社会的存在としての人間とこの病気の関係に目を向けると、世界各地でこれまでにさまざまな差別が存在してきた。日本も例外ではない。いやむしろ、1931年 8月1日に施行された癩予防法にもとづいた隔離政策によって、多くの患者が強制的に各地の療養所に収容されることになったという点で、日本においては特異な差別が存在していたのである。このため、患者は家族やそれまで住んでいた空間との隔絶を余儀なくされた。

さて、パーソンズは1951年の著書と1958年の論文で病人役割について論じており、4つの特徴を示している［Parsons 1951, 1958］。池田［2014］によるパーソンズの病人役割のまとめを参照しつつ、それらを簡潔に示すと次のようになる。

1. 通常の社会的役割が免除される
2. 病気という状態に対して責任を取らなくてよい
3. その病気の状態は好ましくないという社会的含意がある
4. 医師が提供する治療を求める義務がある

明石海人と同時代の癩患者について、これら4つの特徴を考えてみる。第1の特徴についてだが、先に述べたように、当時は癩患者のなかば強制的な隔離が行なわれていた。それを免れた場合でも、患者たちはそれまで生活していた場所から放逐され、あるいは自らそこから出奔し、放浪生活を送ることを余儀なくされることが少なくなかった。たとえば、1941年に発表したエッセイのなかで、伊丹万作は次のように記している。

> 私の郷里は四国であって比較的癩患者の多い地方である。そして其の大部分は浮游癩というか、四国遍路乃至は乞食と成つて仏蹟を浮浪して廻つてゐるのが多い［伊丹 1941: 67］。

放浪生活を送らない場合、自宅で－時には幽閉に近い形で－人目を憚って生活していた。したがって、彼らは一般の社会から切り離されており、通常の社会的役割は免除されていたと考えることができる。

2番目の特徴である病気に対する責任はどうか。明石海人による歌集『白描』の序は、「癩は天刑である」という文で始まっているが（明石 1939: 2）、この「天刑」という言葉は当時癩を意味していた。「天刑」は字義的には、天がくだす刑罰、天の制裁、天罰といった意味であり、それを受ける人間が何らかの罪を犯しているという前提を持つ。このことは、後に明石海人の歌を引用しつつ検討する。

第3の病気の状態は好ましくないという社会的含意だが、よく知られているように癩は忌避されていた。そしてそれは、究竟的な不幸とも考えられた。再び伊丹を引用する。

> 我々は癩というものを単なる肉体の病気の一種としてのみ理解しているのではない。むしろ人生における、最も深刻なる、最も救いのない不幸の象徴として理解しているのである［伊丹 1941: 68］。

では、治療を受ける義務という最後の特徴はどうだろうか。当時、癩患者は療養所に入り治療を受けることが義務とされていた。

2. 歌集『白描』第一部「白描」の検討　社会的な存在としての癩者

歌集『白描』は、1939年2月20日に改造社から出版された。先に述べたように、この歌集は「第一部 白描」、「第二部 翳」の二部構成をとっているが、本稿では「第一部 白描」（以下、「白描」）を検討していく。

「白描」は、「診断」、「紫雲英野」、「島の療養所」、「幾山河」、「恵の鐘」、「鬼豆」、「春夏秋冬」、「失明」、「おもかげ」、「不自由者寮」、「杖」、「音」、「白粥」「気管切開」の14の一連に分けられており、それぞれ5首から75首までの短歌が収められている。「白描」は、ある男が癩と診断された日の描写から始まり、失明し、気管切開を受けるにいたる時の流れ、すなわち「明石海人」という癩患者の診断から死の直前までのライフヒストリーとなっているのである。

最初の「診断」は、さらに「診断の日」、「その後」、「家を捨てて」の三つの部分よりなる。『白描』の巻頭の一首は、その「診断の日」の次の一首から始まる。一般論として、短歌における詞書は短歌のコンテクストを明確にする場合があり、「白描」では当時の癩について知る貴重な手がかりを与えてくれる。そのため、詞書は省略せず掲載することとする。

> 病名を癩と聞きつつ暫しは己が上とも覚えず
> 医師の眼の穏(おだ)しきを趁(お)ふ窓の空消え光りつつ花の散り交ふ（以下、括弧内は、架蔵の1939年6月3日刊『白描』第七刷からの引用ページを示す）(4)

海人を癩と診断した医師の目の穏やかさ、その眼の背後の窓の外には桜の花びらが明滅しながら散り交わっている。詞書と相まって、この歌は癩の診断を受けた時の茫然自失した海人が的確に示されている。

以下、パーソンズの病人役割を用いて海人の短歌を検討し、当時癩がどのように捉えられていたかを分析していきたい。短歌を引用する場合、短歌の後に、連のタイトル／さらにその下位分類のタイトルを、たとえば「島の診療所／医局」といったように表記する。

まず、パーソンズの病人役割の第3の特徴、すなわち「その病気の状態は好ましくないと

される社会的含意」にかかわる短歌を示す。

雲母(きらら)ひかる大学病院の門を出でて癩(かたる)の我の何処(いづく)に行けとか　診断／診断の日（6）

診断を今はうたがはず春まひる癩(かたる)に堕ちし身の影をぞ踏む　診断／診断の日（6）

人間の類を逐はれて今日を見る狙仙(そせん)の猿のむげなる清さ　診断／診断の日（7）

この3首に、当時の癩患者が社会的にどのような立場に置かれていたかを見て取ることができる。癩患者となることは、「人間の類を逐はれ」ること、すなわち人間とは異なるカテゴリーの生き物に堕ちることを意味した。それゆえに、癩と診断された者は、どこに身を置いたらいいのか途方に暮れるのである。

その後、職を辞して一人和歌山の粉河で療養生活を送っていた海人に子の訃報が届けられる。

已(すで)にして葬(はふ)りのことも済めりとか父なる我にかかはりもなく　紫雲英野／紫雲英野（20）

子が亡くなっても、家族から自分に連絡があったのは葬式が済んでからだったという事実に対する感慨を詠んだ歌である。葬式という公的な場には、亡くなった者の父であろうとも癩患者が現われることが忌避されていたことが明確に示されている。同じ一連には次のような短歌がみえる。

ながらへて癩(かたる)の我や己が子の死しゆくをだに肯(うべな)はむとす　紫雲英野／紫雲英野（21）

世の常の父子(おやこ)なりせばこころゆく嘆きはあらむかかる際(きは)にも　同（22）

一首めは自らの子の死に対して、悲しみという感情を持つことができなくなっている自分を見つめた短歌で、二首めには癩を患ったために子との間に「常の世の父子」の関係を持つことができなくなったことが詠まれている。

一方、「診断」の一連に収められている次の短歌は、病気役割の第2の特徴、すなわち病気に対する責任とかかわっている。

ありし日は我こそ人をうとみしかその天刑を今ぞ身に疾む　診断／診断の日（16）

先に見た「天刑」が現われる。かつて人を疎んだのだろう自分が、今は癩という天刑を受け人から疎まれているという意の歌である。病気の責任は自分にあるとする点で、パーソンズが示した病人役割の2番めの特徴「病気という状態に対して責任を取らなくてよい」とは異なる。この短歌は、当時の癩の病気としての特殊性を示していると考えることができる。

「第一部 白描」に、病人役割の第4の特徴である治療を受ける義務についての歌は見いだせない。第1から第3までの特徴を見ると、癩患者に対しては通常の社会的役割は免除され（パーソンズの病人役割の第1の特徴）、その病気は好ましくないという社会的含意（同、第3の特徴）があることが確認できる。しかし、癩に対しては「好ましくない」というよりははるかに強い忌避感があり、それは癩という病気に対して患者は責任を持たなければならないという天刑という概念と関係してくると考えられる。

さて、三番目の一連「島の療養所」以降は、長島愛生園での生活が詠まれている。

父母のえらび給ひし名をすててこの島の院に棲むべくは来ぬ　島の療養所／医局（32）

当時の癩療養所では、一般的に患者たちは仮名を用いていたが、明石海人も例外ではなかった。癩療養所での仮名の使用は、一般社会からの隔絶を意味している。

「島の療養所」は、さらに「納骨堂」、「医局」、「大楓子油」（当時治療に用いられていた）、「白罌粟」、「骨壷」、「静養病棟」、「盆踊り」、「追悼」、「補助看護」（軽症患者による重症患者の看護）、「病める友」に分けられており、治療、患者たちの娯楽、患者の臨終等々について詠まれた歌が収められている。読者は、この一連を読むことによって島の療養所を概観できるようになっている。それに続く一連をみると、一連のなかで最も多い75首を収める「春夏秋冬」では島の自然が、「失明」では文字通り自らの失明が、「不自由者寮」では盲目となった海人の不自由者寮への転居が、「気管切開」では自らの受けた気管切開について詠まれている。

3. もうひとつの病人役割：癩者のナラティブとしての「第一部 白描」

パーソンズが示す四つの病人役割とは別に、明石海人にはもうひとつ病人役割が課されていた。それは、癩患者の生を短歌によって世の人々に知らしむるというものである。1935年6月、海人は前川佐美雄が率いていた短歌結社＜日本歌人＞に入っている。結社誌である『日本歌人』1939年8月号に掲載されている前川の「明石海人と『日本歌人』」に、海人が前川に出した手紙が引用されているが、この手紙で海人は「歌集とはいっても一種のプロパガンダに過ぎないのですから」と記しているのだ［前川［1939］2006: 214 ］。プロパガンダとは、癩患者の生のプロパガンダである。なるほど、たしかにそうであろう。しかし、なんと卓越したプロパガンダであろうか。『白描』第一部「白描」には、癩者というアイデンティティを引き受けることで、その生を世人に理解してもらうという意図を読み取ることができる。

この意図は、しかし、明石海人のみの意図ではない。長島愛生園医師で『白描』の出版に尽力した歌人の内田守人（守人は雅号で、本名は守）の意図が大きく作用している。「海人を『癩者』の典型とし、愛生園をはじめ『癩者の生活』を代表させる、という内田の認識と意図とを色濃く」持っている、という村井の主張に著者は同意する（村井 2012：278）。

歌人明石海人を考える際に、内田の役割を無視することはできない。いやむしろ、内田なしには歌人明石海人は誕生しえなかった。明石海人は長島愛生園において1933年から短歌を作り始め、園内にあった長島短歌会に入っている。その後、1935年短歌結社水甕（1914年結成）に入るが、先述のように同年6月には前川佐美雄が主宰の＜日本歌人＞（1934年結

成）へ転じている。しかし、1939年2月の『白描』出版の契機となったのは、1936年1月に長島愛生園に医師として赴任してきた内田との出会いである。内田は長島愛生園の患者たちに短歌を詠むことを推奨した。

内田が海人の短歌をどのように捉えていたかは、海人没後の1941年に出版された全2巻の『明石海人全集』下巻に内田が寄せた「全集出版を祝し海人を追想す」に、端的に示されている。

> 斯の如く海人の生活素材は癩者としての総てに亙つて居り、その作品は癩者の総ての苦難を代弁せるものと云つてよい（後略）。海人の作品は（中略）五十年か百年か後に日本から癩が無くなつた頃に、日本の癩者の闘病精心を代弁するものであり、其の光彩は永遠に輝くものであると信ぜられる（内田 1941: 2～3）。

たしかに、内田が述べるとおり「第一部 白描」は癩患者の「苦悩」と「闘病精心」を雄弁に語っているのである。

おわり：「第一部 白描」の三つのポイエーシス

池田［2013］は、ナラティブを、「言語実践を通した主体形成」と定義し、それが生み出す三つのポイエーシスとして、(i) 語る主体の形成、(ii) 語られた物語の固定化、(iii) 語られるジャンルの形成、をあげている。この三つのポイエーシスは、明石海人の『白描』の「第一部 白描」がどのように生じ、どのように当時の社会に受け入れられたかを検討する際の導きの糸となる。

まず、「第一部 白描」にたち現れる癩患者として語る主体は、どのように形成されたか。それは、癩患者としての生を受け入れ、そしてそれを世間に知らしめるという動機にもとづいて、短歌を詠むという行為によって形成された。この語る主体が語った診断から気管切開にいたる癩患者の生の物語は、歌集として『白描』が出版されることによって固定化された。明石海人が出現する以前にも、短歌は癩文芸の一翼を担うジャンルであった。しかし、『白描』は25,000部を売り上げるという当時の歌集としては極めて異例のベストセラーとなり［岡野 1993: 492］、その「第一部 白描」は癩患者が癩について詠む短歌というジャンルを確立したのである。この三つのポイエーシスには、医学、文壇、出版社等々、明石海人をとりまくさまざまな力が作用しているが、それについての分析は他日を期したい。

引用文献

荒波力（2000）『よみがえる“万葉歌人”明石海人』新潮社
池田光穂（2013）「病いの語り―哲学と人類学・社会学の架橋」第39回日本保健医療社会学会ワーキングペーパー

池田光穂（2014）「病気になることの意味―タルコット・パーソンズの病人役割の検討を通して」『Communication Design』第10号：1-21

伊丹万作（1941）「映画と癩の問題」『映画評論』1（5）：67-69

前川佐美雄（［1939］2006）「明石海人と『日本歌人』」『海人全集　別巻』皓星社、pp. 212-216

村井紀（2012）「明石海人の“闘争”」『明石海人歌集』（村井紀編）岩波書店、pp. 265-309

村尾圭介「序」内田守人『療養結核読本』白十字会、pp. 序4-5

小笠原登（1936）「癩の極悪性の本質に就て」『臨床の日本』2（6）：88-91

岡野久代（1993）「明石海人年譜」『海人全集　別巻』皓星社、pp. 468-493

岡野久代（2006）『歌人明石海人』静岡新聞社

Parsons, Talcott (1951) *The Social System*. New York: Free Press.

Parsons, Talcott (1958) "Definitions of Health and Illness in the Light of American Values and Social Structure." In Parsons (1964)

Parsons, Talcott (1964) *Social Structure and Personality*. New York: Free Press.

（パーソンズ、タルコット（1973）「健康と病気の規定：アメリカ社会の価値と社会構造に照らして」『社会構造とパーソナリティ』（武田良三監訳）新泉社、pp. 341-384

Parsons, Talcott (1978) *Action Theory and the Human Condition*. New York: Free Press.

佐々木洋子（2010）「病人役割」中川輝彦・黒田浩一郎編『よくわかる医療社会学』ミネルヴァ書房、pp. 6-9

内田守人（1940）『療養短歌読本』白十字会

内田守人（1941）『明石海人全集　下巻』改造社

山下多恵子（2003）『海の蠍』未知谷